

狂気の緑化運動

銀ちゃんというもの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Twitterの『#リップで来た要素を全て詰め込んだ小説を書く』で送られてきた単語、『臨床実験』『折れたポツキー』『ニンジャ』『リンボーダンス』『終末阻止』から作った狂気の短編。

目次

狂気の緑化運動

1

狂気の緑化運動

空間が悲鳴をあげて、傲岸不遜が怒号で黙らせる。

大地は水玉模様の穴を空けて、海は業火に蒸発する。

寒色を探すのが困難な程満ちる砂漠、砂漠、砂漠、砂漠。

阿鼻叫喚、狂瀾怒濤、悪夢を丸ごと絵に書いた様な光景に得物一つで立ち向かう者がいた。

彼女は血の雨降り注ぐ戦場を駆る。

ビルの代わりに築かれた屍山血河を超えて、烈火に魂を溶かし。

鉄降り注ぐ最後の争いの中、ただ一つの信念、——をもつて。

事の発端は休暇中の事、緑化運動を手伝う単発のアルバイトだった。

通常ボランティアでやる様な仕事の割には給料が高く仕事次第ではボーナスもある。

しかし当日まで仕事内容が伏せられている所がとても怪しい。

だが彼は万年金欠であった為、たとえ血反吐を吐くような内容であろうとやり遂げて

やるという気合いと共に仕事を受けた。

受けてしまった。

当日、とても緑化の仕事の集合場所とは思えない、極々平凡な都会のコンクリートジャングル。

その中の公園ですらない鉄筋コンクリート製のビル。

蒸し暑い猛暑の夏の日、そこへ訪れた。

「なーぜ……なぜ。こんな日に階段にぼんなきやなんねーんだ……はあ。なんで、エレベーターが故障してんだよ！ ……はあ……疲れた……」

暑い、暑いと苦言を零し、黒い髪に暑まる熱を鬱陶しいと嘆きつつ、彼はビルの外壁に引っ付いて付いた鉄の階段を昇って4階へと辿り着く。

重々しい鉄の扉の取手を捻り前に引くと、涼しい室内の空気が彼の体を掠って癒す。

天国はここにあったと言わんばかりの表情を浮かべ、ころつと顔色を嬉々とした物に変えて室内へ素早く入り込む。

「おっ……ここかな。ふう……やつと着いたぜ……」

先まで白い廊下広がる広いビルの中、目標の事務所を探した彼はすぐにその札を見つけた。

『山田脳医学研究所機械科第四支部』

何処に緑化しようという意欲があるのか問い質したい衝動に駆られるツツコミどころ満載の文字が、アクリルの透き通った札に黒く印刷されている。

「まあ、いいか」

彼は研究所の戸を、遠慮なく開いて中へ入った。

「こんにちは。緑化アルバイトの方でございますね……お手数お掛け致しますが、お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

プラスチックの人より少し高い敷居で区切られたそこで待ち受けていたその女性に彼が「こんにちは。窪木幸人くぼきゆきとです」と答えると「ありがとうございます。では、こちらです」と奥へ案内される。

その部屋はなんとも面妖な物であった。

何も植えられていない長方形の植木鉢が部屋の右端に並べられ、左端にはとてもまとも生きている中では見えない巨大かつ超精密な近未来的なモニターや操作版が付いた機械が置かれる。

それらに挟まれるように、それは鎮座していた。

白い掛け布団、ふかふかしていそうな敷布団それが木製の台の上に乗っかっている。簡単に言えば白いベットだった。

しかしそれだけではない。

これまた白い枕の横に置かれたそれは鉄製のリング。

ちようど頭にすっぽりハマリそうな大きさをしたそれは赤黄色青その他、多種多様な色のコードで例の機械と繋がっており、一筋の虹を描いている。

その傍ら、彼を待つていた白衣の男が居た。

「やあ、こんにちは。今回は私達、山田脳医学研究所の緑化プロジェクトのアルバイトに参加してくれてありがとう」

突如話しかけられた彼はどう返事を返せばいいか迷ってしまった。

その様子に、「これはいい結果になりそうだ」とぼそりと男が言った言葉は彼に届かなかった。

「さて、早速、今日の仕事の内容を話していこう」

そう男が始めたところで初めに居た女性がパイプ椅子を2人分持つてきて、幸人にもうぞ座ってくださいと勧め、荷物を端へ置く。

「幸人君、君には最初にあそこにある疑似生態信号発信装置を頭に付けて、電子的な仮想空間へ意識を落してもらおう事になる」

「……はい？」

それはいわゆるどういう事だと、VRMMORPGやSFという単語すら浮かばない。

ちなみにこの世界の技術力でもまだVRMMORPGなどは研究されている途中な筈なのだ。

浮かんで当然の疑問符の海に沈んだ彼は。

「そしてそこで『草生える』行動をしてもらう事になる」

「……？」

更に告げられる理解不能な内容によつてさらに深くへと溺れることになる。

おかしい、この男は日本語を話しているはずなのだが全くもつて意味を理解することが出来ない。だいたい緑化なんだから苗木を植えに行つたりするのでは無いのか。

そう、内心頭を抱えている彼を気に留めず、男の話は進んでいく。

「まあ、小難しい事を言つたところで、これは理解できるものでは無いだろう。……取り敢えず、そのベットへ寝て疑似生態信号発生装置を頭に取り付けてもらおうか」

男にそう言われ、彼は誘導されるがままにベットに寝転がり頭に疑似生態信号発信装置とやらを取り付けた。

男が近未来的な機械の操作部らしき所の電源ボタンに触れると彼の意識はまるで寝ている時の様に暗転していく。

ただ寝る時と違うのは外界から強制的に意識を散らされる感覚が割り込んできた事だった。

「……はどことだ！ 何があった!？」

ふと意識が戻った彼は寝起きにしては嫌に鮮明な記憶に反応して起き上がる。

しかし妙に身体感覚がおかしい。

声の質も元々はまるで違った。

「これは……どういう……?」

成人した男から発せられるものとは思えない程、鈴のように甲高く幼い音色。

肩や腰に常に感じていた痛みが全く無く、少し悪かった筈の視力も昔友人の眼鏡をかけた時のように焦点があっている。

何より、先程寝させられたベットの上ではなく木造の床に転がっているだけであつた。

『これで、理解してくれたかね』

困惑する彼の眼前、虚空に出現したモニターには先程の男が映っていた。

「これは……どういう事ですか?」

『先程言った通り。疑似生態信号発信装置、一般的にはVRMMORPGなどと呼ばれる作品で使われる生態信号を送る機械を使い幸人君の意識を仮想空間へ落した。だからそこで『草生える』行動をして貰いたい』

「…………えつと…………これはどうして緑化に繋がるので…………？」

『ああ、今説明しよう。今君の状態は全国100ヶ所以上ある私達の研究所の研究員全員がリアルタイムで頭に疑似生態信号発信装置の様な装置を付けながら視聴している』

「…………はあ」

『そして、幸人君、そして全国で募り今別の場所でのアルバイトを受けている人達が行った行動で、その配信を視聴する研究員が『草生える』と感じたところで、それをなんやかんや深層意識と無意識分野がなんとかかんとかほにやららをして現実へ影響を及ぼし何も植えていない植木鉢に無から草を生やそうという計画の臨床実験なのだ』

情報量の嵐に一瞬ふらつくも、内心諦めてきた彼は簡潔に済ませようと「で、これからどうすればいいので？」と質問する。

『ふむ、幸人君がいる部屋の扉から出ると終末の地球の最終決戦場とも言える場所へ繋がることになる。そこで幸人君が巨大ポツキーを片手に単騎で戦い、『草生える』行動をしてくれると嬉しい』

「…………???!」

容量オーバーで大爆発しそうな思考を押しさえ込みつつ彼は最後の質問をした。

「では…………今俺の姿どうなってます？」

『うん？ ……ああ、すごく可愛らしくなっている。見たいならその部屋に鏡があるか

から見ればいいと思うよ』

そう言われて、彼は部屋を見回すと彼の身長程ある鏡を見つける。

そこへ歩を進め、覗き込むと初めに視界に入ったのは焼け残った灰のような色だった。

それを自分の髪だと理解できたのはその10秒後。

しつかりと硬直した彼は今の己の姿を見る。

まだあどけない顔をした少女であった。

歳は10を少し過ぎた程だろうか。

白磁の柔肌と凹凸の無い胸が庇護欲を誘い。

腰まである灰の髪はそれより黒い灰色をした瞳を守るように隠している。

どうしてその瞬間まで気付かなかったのか、服とも言えない様な奴隷みたいな茶色い

ボロ布。

彼——いや、少女は困惑以前にこのアバターしようじょを作った人間の趣味は相当終わっている

と悟る。

『ふむ、では、頑張ってくれたまえ』

その声とともに、鏡に反射して見えていた少女の後ろにあるモニターは何処かへと消えた。

「えっええ……どうしろと……」

いつの間にか足元に出現した巨大ポツキーを見て、まずこれを持ち上げられるのか、そこから悩んで頭を抱える少女だった。

数時間経つて不毛の大地を裸足で駆けて巨大ポツキー片手に幾千もの銃兵の軍勢を相手に鎧袖一触する少女の姿があった。

それはなんとも狂氣的、とても草生えるから離れて寧ろ捻じ曲がって近づいた様な冒瀆さを感じさせる。

それはそうだ。

まだ幼い少女が巨大な鈍器ポツキーを振り回して兵を防具ごと撲殺して血に塗まみれているのだから。

時に原型を無くした死体を盾に使うことも、投擲武器に使うことも厭わずただただ無双する。

時に銃弾を視覚に捉えポツキーでハエのように叩くことも、リンボーダンスの選手も真つ青な体勢で避けることも可能とする。

少女の表情は色ひとつ無い『無』。

瞳は死んで、表情筋は衰え、敵を空虚に見つめる。

「ぎゃあああああ！ 逃げろ！ 悪魔が、無の悪魔が来——」

「助けてくれ俺には妻と子——」

「金でもなん——」

無慈悲に、必要最低限の力を最大効率で振るう。

顔の下に隠す感情はただ一つ、『金稼ぎたい』。

冷酷無情の死神、冷淡な戦天使、無色の悪魔、狂乱の悪鬼、戦車より戦車してる奴……

これはNPC^{銃兵}達にたった1時間程で呼ばれるようになった異名達だ。

何故、一般人出会ったはずの彼がこのようなことが出来ているのか。

答えは単純、作者の都合である。^{システムアシスト}

そのお陰か兵を瞬殺する力を自在に扱う少女だが、決してこの仮想空間で最強という訳では無い。

バキツそう音をたて、折れる少女のポツキー。

寧ろどうして今まで折れなかったのかという疑問が浮かぶが諦めるしかない。

一体何が原因か、それはひとつ、他のプレイヤーが拳銃より放った15.7mmがポツキーに命中、破壊したのだ。

何故折れただけで済んだのかとか言っちゃいけない。

さて、ゲテモノ拳銃をぶっぱなしたそのプレイヤーの見た目は完璧に忍であった。

拳銃は最後の武器じゃないのか、と言いたいところだが月光でも忍者部隊でもない人間にそれを伝えたところで無駄なものは無駄。

その忍は姿かたちを少女と同じく変えられていないのなら青年と言った風体でもネタを理解出来る年齢ではない。

理解できるのだとしたらそれはもうサンダーバードが人形劇と言って伝わる人間か、親が原因くらいなものだろう。

ロマン砲をいつの間にか少女の顫こめかみの押し付けて忍は言った。

「……………」

「ええ……………今なんて言ったのです!？」

なぜどうしてこういう場面で決めゼリフ決めるならヘタレてボソボソ声で話すなよと言の意味も込めてツツコミを放った少女は。

「……………」

最後までヘタレた忍びの銃声と共に頭に強い衝撃を受けることも無く、破裂するような感覚と共に人生で1回しかないはずの死の中でも平和の中では珍しい銃殺という体験を痛覚軽減無しで味わったのだ……………。

「痛えよ……………ッ!」

痛えよ、で済む少女……いや彼……あれ？ 少女……？ の精神性に驚くべきか。

何故か現実に戻ったはずが少女の姿のままの彼を憐れむべきか羨むべきか。

少女の衣服まで変わらない状況に悩むべきか。

それとも、緑で包まれた研究所にツツコミを入れるべきか。

「……Why!? どうゆうことだってばよ！」

情報過多に混乱困惑、理解不能な現状に口調も性格も崩壊しかける少女の耳に聞こえてくる笑い声。

「はっはっはっはっ……思った以上の効果だ！ まさか物を写すだけでなく既存の物質すら形を変えてしまうとは！」

あまりの喜び故か狂ったように爆笑を続ける男は、少女の肩を叩いて「取り敢えず、服を用意しておこう」と思考が混沌と化している少女を宥める。

「あっ……はい。これ一体どうなっているの？」

「ああ、この現象か。これは恐らくだが、人間の意識が——やはりあれがこうして——

——深層意識に——法則の影響で——……………」

「いや全く理解できません」

「ふむ、では簡潔に。『集団の認識を具現しようとしたら既存の物質にも影響が及んだ』

「……………うん？」

「いや、だから……集団の——……………」

「いやいいですから！ 凄いいことはわかりましたから黙ってください！」

「そうかそうか、ああ、服と給料はそこに用意しておいた。今日はありがとう」

「あっはい」

男が天才なこと以外、あまりに現実離れた事象の数々が少女を襲った為に理解能力が追い付かず、その日に少女に起こった出来事を理解出来たのはその1週間後の事だった。

ちなみにT Sしていることを自覚したのは四日後のことである。